

Title	巻頭言 情報とは何か：インフォメーションと「アウト フォーメーション」
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.45 : 3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2009
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

巻頭言 情報とは何か

——インフォメーションと「アウトフォーメーション」——

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長
阿久戸 光晴

夏目漱石の『夢十夜』という小説の中の第六夜に不思議な記述がある。主人公が夢で、東京・護国寺の山門で運慶が仁王を彫っていると聞き見に行く。そこで運慶のよどみない見事な彫りさばぎに主人公が思わずうなると、野次馬の車夫が「あれは鑿や槌で顔をつくっているのではなく、木の中に既に仁王が埋まっているので、簡単に彫り出せる」と言う。そこで主人公は家に帰り、家にある木を次々と彫るが何も出て来ない。そこで「明治の木にはとうてい仁王は埋まっていないと悟った。それで運慶が今日まで生きている理由も分かった」という主人公の言葉で閉じられる。目に見える木という現実の表層の奥底に「仁王」という目に見えなくとも或るものが存在することの指摘とそのことを捉えられない時代の問題性を、漱石は指摘している。そしてこの解釈を敷衍すれば、「仁王」に象徴されるヴィジョンや情報こそは、後来する現実現象を生み出すことに繋がる。

ところで virtual reality という言葉があり、日本では「仮想現実」と訳される。しかし virtual の語源は「美德」を意味する virtue であり、「実質的には存在するもの」(ラテン語の virtus は実力の意)

が本来の意味である。ところが日本では「目に見えないものが存在するはずがない」という先入観から、虚構なるものと誤されるようになったと考えられる。しかしおよそ存在するものの奥底には、あの仁王のような virtual reality「実質的には存在するもの」があり、存在するものすべては運慶のような人物に彫り出されるのを待っている。invisibleではあるが fictional でなく、virtual に存在する reality。物事の奥底には、ちょうどタイタニック号を沈めた冰山のように目に見える海面上の山よりもはるかに巨大な存在が潜んでいて、現実に見えない現象となって現れてくる。見える現実とは、豊穡なる可能体の或る一部分が現れてくるものであろう。逆に、巨大な可能体がまずあって、その一部が冰山の一角のように回転しながら海上に「現実」となって現れてくると見るべきである。この事実が電子化社会の到来とともに、新しい装いとともに見れる。‘virtual reality’ というプログラムに従って構成された「現実」を表すコンピュータは、この「実質的には存在するもの」の reality を教える。

このことは教育に当てはまる。「教育する」‘educate’は引き出す意である。優れた彫刻家が木から仁王を掘り出すように、教育者は明確な教育理念のもと有益な可能体を学ぶ者が自ら形成していくことへ導く。教育者には具体的教育イメージが見えていなければならない。ところで最近まで日本の教育は基本的にあたかもコンピュータに猛烈に情報をインプットするシステムであつたと言えよう。ある日コンピュータの容量を超える情報過多で、作業効率が低下した、そして今度は情報を急速に廃棄し、基本ソフトのいくつかまで初期化してしまい、コンピュータがうまく動かなくなつた、このように蛇行をしているのが現代教育政策かもしれない。大切なことは、何よりもあの「木」自身に考える力と必要な情報を選び取る力を育むことである。木自身が成長するために必須の情報は、明確な理念

と規範である。これこそ情報の本質である。

昨年当総合研究所国際金融研究会が、講師としてお招きした読売新聞社東京本社・老川祥一社長は「情報」について多角的観点から示唆に富んだ話をされた。ところが講演後の一般質問は、ほとんど将来予測に関する見解を社長に問うものばかりであり、社長は苦笑しておられた。そもそも情報とは、このような固形的現象の断片資料ではあるまい。「情報」の英語は‘information’である。それは情報に接する者の「内的」*in*、「形成」‘formation’をもたらずものである。そして内的に形成された思想・理念・価値が、やがて外的形成をもたらずようになるものであろう。それはあの漱石の「第六夜」の構造そのものである。その意味で、‘information’は‘out-formation’（新造語）へ展開する。凶暴な‘information’は恐ろしい現実をもたらし、建設的‘information’はいかに困難の多い現実の中でも突破口を切り開いて次世代の社会の基礎を形成する。重要なことは、現実に氾濫する情報の価値を正しく識別し、人間存在や歴史の中に隠されている仁王像という真の‘information’を正しく洞察する鑑識眼である。それが良き社会建設という‘out-formation’を生み出すのである。